

# 思考力・判断力・表現力を育成する授業づくり

－ 全教科で取り組む〈10の考え方〉を活かした3つの共通実践 －

## 1 これまでの研究

本校では、国立教育政策研究所の研究指定を受けて、平成24年度から平成25年度にかけて教科横断の思考力・判断力・表現力の育成についての研究を行った。そして、研究のキーワード「未来を拓く思考力・判断力・表現力」を次のように捉え、全教科で生徒の発達段階に応じた指導の在り方を追究してきた。

### 未来を拓く思考力・判断力・表現力

#### ①論理的な思考力・判断力・表現力

主張・根拠・理由付けの筋道を立てて、確かに思考して判断し、表現する力

#### ②多面的・総合的な思考力・判断力・表現力

複数の視点から考えたことを総合して、幅広く思考して判断し、表現する力

#### ③批判的な思考力・判断力・表現力

主張・根拠・理由付けやそれらの関連について、正誤・適否・確かさを検証しながら思考して判断し、表現する力

まず、全教科で共通して取り組んできたのが「未来を拓く思考力・判断力・表現力」のベースとなる「論理的な思考力・判断力・表現力」についての共通理解とそれらを活かした実践である。「論理的」という言葉には様々な捉え方があるが、本校ではトゥールミンモデルや三角ロジックの主張・根拠・理由付けの3つの要素をもとに、「主張・根拠・理由付けの筋道が立っており、確かであること」と捉えた。主張・根拠・理由付けについては、それぞれ次のように定義した。

- 主 張 … 課題に対する自分なりの結論
- 根 拠 … その場にいる全員が納得できるような確かな情報
- 理由付け … 根拠をもとにした解釈・説明、根拠から主張までのプロセス

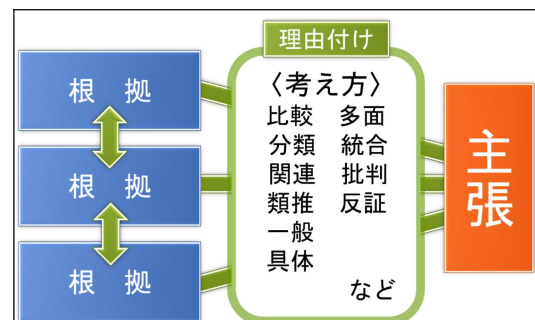
また、平成25年度からは、理由付けの充実を通して、未来を拓く思考力・判断力・表現力を向上さ

せるために、「比較、分類、関連付け」などの〈10の考え方〉【資料1】を教師だけでなく生徒も意識し、教師は課題づくりや発問・指示の工夫、評価等に役立てたり、生徒は自らの考えを振り返り、新たな課題解決に活かしたりすることに役立ててきた。

| 考え方 | 思考のキーワード       |
|-----|----------------|
| 比較  | 共通点は 相違点は      |
| 分類  | この視点で分けると      |
| 関連  | これらを関連付けると     |
| 類推  | 似たようなことから推測すると |
| 一般  | これらのことから       |
| 具体  | 例えば            |
| 多面  | 他の視点から         |
| 統合  | まとめると          |
| 批判  | 本当にそう言えるのか     |
| 反証  | 反対の例を示すと       |

【資料1】〈10の考え方〉

そもそも、この〈10の考え方〉は、全国学力・学習状況調査(数学)におけるB問題「活用」の問題作成の枠組の中にある数学的なプロセスや片桐(2004)の「数学的な考え方一覧」を参考にし、それを全教科共通で扱えるものに整理したものである。これら「主張・根拠・理由付け」や〈10の考え方〉をそれぞれの教科の授業を考える時や生徒を指導する時、生徒の表現を評価する時などに意識することができるようにするために、「論理的思考モデル」【資料2】を作成し、すべての教科の授業で共通した実践を行うようにした。



【資料2】論理的思考モデル

また、教科の特性を活かすために、次の3つのグループに分けて、研究を進めることにした。

- A 考えを「深める」グループ(国語, 数学, 理科)
- B 考えを「広げる」グループ(国語, 社会, 技術・家庭, 健康)
- C 考えを教科特有の表現に「活かす」グループ(国語, 英語, 音楽, 美術, 保体)

教科の特性を活かして分担しながら取り組むことによって、学校全体で効果的・効率的に「未来を拓く思考力・判断力・表現力」を育成することができるのではないかと考えたのである。

現在は、以上のような研究体制のもと、今年度から全教科で共通して実践することとして、〈10の考え方〉を基盤としたⅠ～Ⅲを設定し、「思考力・判断力・表現力を育成する授業づくり」に取り組むことにした。

- Ⅰ 思考の見える化
  - Ⅱ 思考を促す学習課題
  - Ⅲ 思考を揺さぶる授業展開

それでは、次にⅠ～Ⅲの具体例を示しながら授業づくりについて述べてみたい。

## 2 思考力・判断力・表現力を育成する指導と評価

### (1) 思考の見える化

生徒の思考力・判断力・表現力の質を高めるために、教師の役目は、生徒の知的好奇心を引き出し、思考させ、表現させたものを適切に評価し、指導に活かすことである。そのための1つの方法として、生徒の思考を見える化することが有効であると考え。次に、その有効なツールとして2つ挙げる。

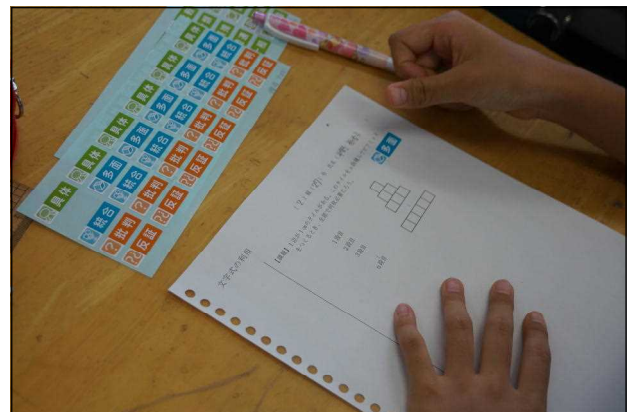
まず、1つめの有効なツールとして、【資料3】や【資料4】に示したような、〈10の考え方〉のカードやシールを活用する。このカードやシールを活用する目的は、授業の中で教師が生徒に身に付けてほしい考え方を明確に示し、生徒に自覚させることである。課題解決に必要な重要となる考え方を教師が意識、強調することによって、生徒は自然とその考え方の意義や目的を知ることになると考える。

なお、このカードとシールの活用に関しては、今年度から取り組み始めたツールであるため、

現在はその使い方について検討しているところである。

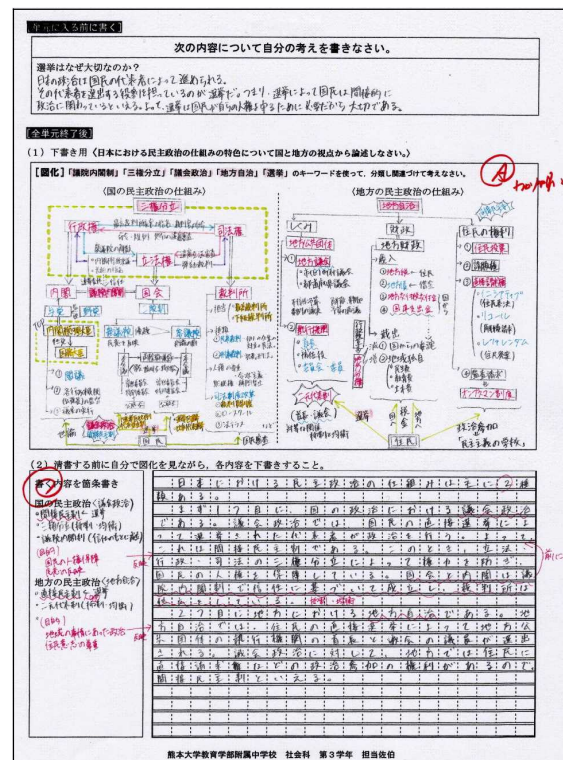


【資料3】 〈考え方〉のカード



【資料4】 〈考え方〉のシールを貼る

生徒の思考を見える化する2つめのツールとして、生徒が自分の考えを記述するためのノートやワークシートの工夫である。この具体的な工夫は、各教科で取組が異なっており、例えば、「L字型ノート」を使って考え方やキーワード、学習の振り返りを書かせたり、学習内容の関係



【資料5】 社会科のワークシート (図化)

を把握させるために「図化」を取り入れたりしている教科もある【資料5】。

思考の見える化を〈10の考え方〉を基に具体化したことによって、評価の質も一層高まってきた。これまでは、生徒のすばらしい考えを、「すばらしい考えだね」などと感覚的に評価しがちであったものが、例えば「○と△を比較して考えているところがすばらしい」などと、生徒の思考を具体的に評価し価値付けできるようになった。つまり、生徒は、自分がどんな考え方をしたから先生から褒めてもらっているのかを自覚することになるのである。このことは、逆に生徒が課題解決で困っているときにも言えることであり、どんな考え方でアプローチすれば解決できそうなのかをヒントとして与えることもできる。

最後に、思考の見える化は学習指導案にも反映させている。教師は、生徒がどのような〈考え方〉を使ってどのように思考プロセスをたどるのかを具体的に予想し、どのような基準でどのような評価を行うのかを明確に持つておくことが重要であると考え。是非、そのような視点で学習指導案をご覧になり、参考にさせていただきたい。

## (2) 思考を促す学習課題

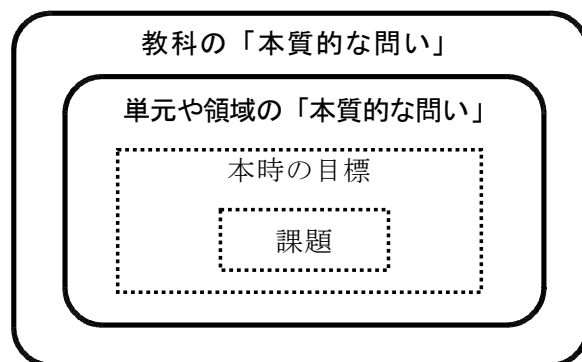
生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指す授業づくりを考える際に、教師がまず考えなければならないことは、生徒が学習を終えた段階でどんな力を身に付けているのかであろう。本校では、西岡(2008)の提唱する「逆向き設計」論にあるパフォーマンス課題の作り方を参考に、①求められている結果を明確にする、②承認できる証拠を決定する、③学習経験と指導を計画するの順で考え、教科が求める最終的な生徒の姿を捉えることにした。つまり、まず、教科が求める「本質的な問い」を明確に表すことを行った。たとえば、国語科における教科の「本質的な問い」は次のようなものである。

### 例 国語科における教科の「本質的な問い」

互いの立場や考えを尊重して考えたり、伝え合ったりするためには、どのような言葉の使い方をすればよいか。

国語科の例のように、教科の学習を通して最終的にこのような問いに生徒が答えることができる力を育成することが「本質的な問い」を設定するねらいである。各教科の「本質的な問い」については、各教科の紀要に述べてあるので参考にさせていただきたい。

このように、「逆向き設計」論の考え、つまり、【資料6】のように、「マクロの設計」から「ミクロの設計」までの学習計画を明確にすることを全教科で共通理解した。



それでは、「本質的な問い」とはどのような問いであろうか。西岡は、次のような具体例を挙げているので、その一部分を紹介する。

| 「本質的な問い」の例  | 「本質的ではない問い」の例  |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・その国の特徴は、どのように捉えられるか？</li> <li>・星は天球上をどのように動くのだろうか？</li> <li>・柔道をさらに楽しむためには、どうしたらよいか？</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・中国の人口は何人か？</li> <li>・今日の日の出の時刻は何時か？</li> <li>・「左座右起」の順とは何か？</li> </ul> |

この例のように、「本質的な問い」とは一問一答のような問いではなく、論争的で探求を触発するものであると述べている。授業における課題においても、できる限り、このような「本質的な問い」に基づいた課題を設定したい。

それでは、「本質的な問い」を踏まえた上で、〈10の考え方〉を意識した学習課題や発問・指示をどのように工夫すればよいか、2つの教科の実践例から分析してみたい。

## ①数学科の例

### ・題材名

2年「図形の合同と証明」

### ・単元の「本質的な問い」

仮定から結論へと導くためには、どのように論を組み立て、どのように表現すればよいのだろうか。

### ・本時の目標

星形五角形の先端の角の和が $180^\circ$ であることを、既習内容を根拠に示しながら、筋道を立てて論理的に説明することができる。

### ・学習課題

「なぜ、星形五角形の先端の角の和はいつも $180^\circ$ であるといえるのか説明しよう。」

この授業の学習課題は、〈10の考え方〉の「一般」と「具体」、つまり、図形の性質を帰納的に捉えて一般的に言えそうなことを予想し、いつもそうなることを演繹的に証明する力を身に付けさせることをねらった課題である。それでは、この課題を〈10の考え方〉の「多面」、つまり、図形を多面的に見る力を身に付けさせることをねらった課題にしたい場合、次のように目標と課題が変化してくる。

### 「多面」の〈考え方〉をねらった目標と課題

#### ・本時の目標

星形五角形の先端の角の和が $180^\circ$ であることについて、図形を多面的に見ることを通して、いろいろな方法で説明することができる。

#### ・学習課題

「星形五角形の先端の角の和が $180^\circ$ であることを、できるだけ多くの方法で説明しよう。」

次に、この課題を〈10の考え方〉の「批判」、つまり、批判的思考力を身に付けることをねらった課題する場合は次のように変化してくる。

### 「批判」の〈考え方〉をねらった目標と課題

#### ・本時の目標

星形五角形の先端の角の和について、頂点Aをいろいろな場所に移動させたとき、先端の角の和がいつも $180^\circ$ になるのか調べることができる。

### ・学習課題

「星形五角形の頂点Aをいろいろな場所に移動したとき、先端の角の和はやはり $180^\circ$ になるといえるだろうか。」

このように、生徒の身に付けさせたい力が何なのかによって、学習の目標と課題は柔軟に変化させることができる。したがって、教師が生徒の身に付けさせたい力を明確に持つこと、アレンジするための深い教材研究をすることが重要となってくる。

## ②国語科の例

### ・題材名

2年「神奈川沖浪裏（赤瀬川原平）」

### ・単元の「本質的な問い」

筆者の文章の表現の仕方には、どのような巧みさがあるのだろうか。

### ・本時の目標

筆者の文章の表現の仕方について、多面的な観点から交流し作文を通して、根拠を明確にして自分の考えを説明することができる。

### ・学習課題

「筆者の表現の工夫と効果について発表しよう。」

この授業のポイントは、次のような課題提示の後に出される教師の指示にある。

### 指示：多面

読みの観点ごとにグループで交流しよう。

本校では、このようなポイントを学習指導案にも明記するようにしている。この授業では、まず、読みの観点とは何かを全体で確認し、次の5観点を洗い出す。

ア 擬態語や擬音語

イ 比喩や擬人法

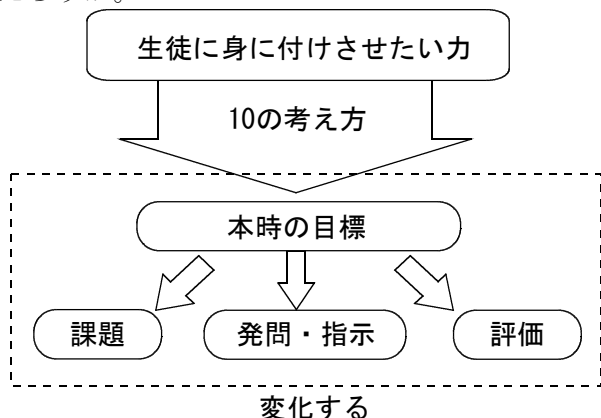
ウ 話し言葉（文体）

エ 遠景と近景の対比

オ 絵画を見る視点の移動

1人1観点×5人でグループを作り、5つの観点から筆者の表現の工夫と効果について意見を出し合うという工夫点がある。この工夫は、

〈10の考え方〉の「多面」、つまり、筆者の文章の表現の巧みさを多面的に見る力を身に付けさせたいというねらいが込められた指示なのである。もし、このねらいがなかったら、逆にどのような指示になるのであろうか。今年度は、学習指導案の参考資料「授業改善ビフォーアフター」を作り、そのことについても書くようにしている。この「授業改善ビフォーアフター」は、教師の意識・強調がいかに重要なのかを示す資料である。「こんな課題を作るのは当たり前だ」、「こんな発問をするのは当たり前だ」と思っていたことを一旦疑ってみて、「なぜ、このような発問・指示を行っているのか」「なぜこのような課題がいい課題なのか」を私たち教師こそが批判的に考えることが授業改善のポイントであると考え。そして、教師がそれを再認識したときから、課題の作り方や発問・指示の出し方、評価の仕方が大きく変化してくのではないだろうか。

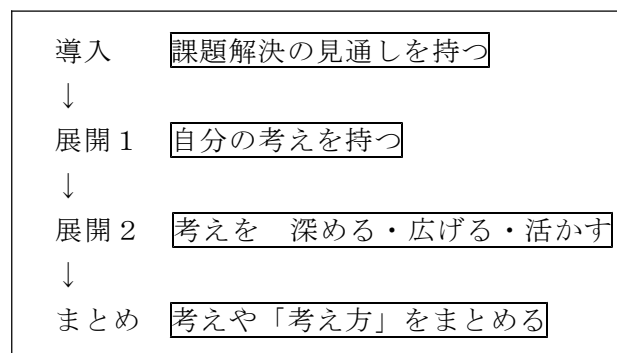


### (3) 思考を揺さぶる授業展開

生徒の思考力・判断力・表現力を育成するために、課題の分析や発問・指示の分析を述べてきた。さらに、重要なことは1つの課題が解決した後に、自分(自分たち)の考えを振り返り、評価・改善する場面が必要だということである。なぜならば、自らの考えを振り返り、評価・改善するという行為が思考をより深化させるからである。本校では長年にわたり、授業の展開部分において、2つの場面を設定するようになってきた。生徒に自分の考えを持たせる場面と他の生徒や教師の発問・指示により考えを揺さぶり思考を再構築させる場面である。

また、本校では、国立教育政策研究所が全国の高等学校第2学年を対象に実施した「特定の課題に関する調査(論理的な思考)」を参考に、

授業を6つのスタイルに分類し(詳細は平成25年度紀要を参照)、各教科で様々な授業展開の工夫も行っている。



思考を揺さぶる授業展開例

思考を揺さぶる授業展開の例として、保健体育科を参考に見てみる。保健体育科では、技能の質を高めるために、**作戦1**→**ゲーム1**→**作戦2**→**ゲーム2**の授業スタイルをよく取り入れている。それでは、なぜ、**作戦2**が必要なのだろうか。**作戦2**が果たす役割を考えれば分かるであろう。つまり、**ゲーム1**で出てきた課題点をもとに、**作戦1**を批判的に見て、評価・改善する場面を**作戦2**として設定しているのである。したがって、教師に批判的思考を育成するという視点がなかったら、このような展開は起こりえないのである。また、評価・改善を行う主体は生徒であり、教師は評価・改善をさせるための手立てを講じておけばよいのである。

以上、(1)～(3)をまとめると、次のようなことである。

- I 「思考の見える化」で生徒の思考を見取る。
- II 「思考を促す学習課題」で生徒の思考を引き出す。
- III 「思考を揺さぶる授業展開」で生徒の思考の質を高める。

重要なことは、〈10の考え方〉そのものを単独で身に付けさせるのではなく、I～IIIの3つの共通実践を〈10の考え方〉を活用して工夫し、日々の授業実践を積み重ねることである。

#### 【引用・参考文献】

西岡加名恵(2008).『『逆向き設計』で確かな学力を保障する』明治図書, pp. 18-19.